

喜び歌いつつ

【聖書】詩編 100 編 1～5 節 【賛歌。感謝のために。】

全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。感謝の歌をうたって主の門に進み／賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。主は恵み深く、慈しみはとこしえに／主の真実は代々に及ぶ。

【序】 歌舞音曲をもってする祭

日本にはどの町・村にも、鎮守の社が祀られています。そしてお祭りがにぎやかに催されます。祭に欠かせないのがお神楽です。笛・太鼓・舞樂が奉納され、人々も皆踊ります。この神楽の起源は多分、古事記(日本最古の歴史書)に記された天の岩戸の故事によると言われています。

天照大御神は日本の天皇家の氏神で、伊勢神宮に祀られています。太陽を神格化した神ですが、弟のスサノオの度を過ぎた乱暴に怒り、天岩戸に引きこもってしまわれました。全国は真暗闇に覆われました。困り果てた神々が相談して、岩戸の前に大きな桶を伏せて置き、女神の一人アメノウズメが笛・太鼓に合わせて足を踏み鳴らし、舞を舞いました。

アメノウズメは陶醉して胸元も露わに激しく踊ったので、神々がやんやの拍手喝采をしました。その騒ぎに天照大御神は岩戸を開けて覗き見られたので、すかさず手をとって外に連れ出し、世に光が戻ったというお話です。ここから歌舞音曲をもってする祭が始まったと言われているそうです。

さて今日の聖書、詩編 100 編も、喜び・感謝・讃美の歌声をあげて礼拝へ集おうという呼びかけの歌です。私たちは、今日このように礼拝に集っています。「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ」と呼びかけられているのです。喜びの叫びを上げようではありませんか。私たちの礼拝も、讃美・音楽と切り離せない結びつきをもっているのです。

【1】 創造者を神とする信仰

なぜ喜びの叫びをあげて集まり、神さまを礼拝するのでしょうか？「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた」(2節)からです。この世界には無数の命が生きています。空に海に野に山に様々な命が生きています。私たちはその命に囲まれ、その命の一つとして今生きています。この命はどうして存在するようになったのでしょうか。誰によって創られたのでしょうか。偶然に無から有が生まれたはずはありません。

聖書は、神さまが創造者であるとする信仰から出発します。創造者を神とする信仰とも、言えるでしょう。混沌とした闇に覆われた世界に、神さまは天と地を造り、光をもたらし、万物を非常に良いものとして創造されました。特にご自分に似せて人間を造り、世界の支配をお任せになりました。

神さまはご自分に似せて私たちをお造り下さった。私の命は神さまがお造りなり、私にお与えくださったのです。創造には、創造者の意志・目的が込められています。私たちはそれぞれ、神さまからなすべき務めを与えられて、造られたのです。神さまが私に期待しておられる務めとは？

私の友人の一人がこう語っていました。病院へ行き定期健診を受けたら、肝臓に大きな影がある、大きな病院で調べてもらうようにと言われました。当時のMRIは 1 時間かかりました。狭いトンネルの中でじっと寝ている間の長かったこと。肝臓癌なら余命は半年だろう。死ぬのは怖い。家族はどうなるのか。悲観的な思いがとめどなく浮かんできました。

「神さま、助けてください」と叫びました。すると、私の命は神さまのものだという思いが浮かびました。命が自分のものなら、その命がなくなれば、自分そのものも消滅します。しかし神さまのものならば、私は死んでもそれで終わりではない。私は神さまから授かった命をどのように役立たせたかを、神さまの前でお答しなければなりません。どんなお答ができるだろうか。

これまでの命の用い方を、次々と思い返しました。あの時あんな恵みを頂いた、こんな恵みを頂いた。「神さま、私を愛してこれまで生かして下さい、有難うございました」と感謝が込み上げてきました。そして「もしも更に生きることを許して下さいなら、その命をもっとよく使わせていただきます。どうぞ御心のままになさして下さい」と祈れるようになりました。心が平安になり、孤独・恐れ・不安が消えました。

検査の結果は、単なるあざで、癌ではありませんでした。神さまは更にお用い下さろうと、命を与え直して下さいました。心から感謝し、「喜び祝い、主に仕えよ」という言葉が心に浮かんで来たそうです。「神さまは美しい万物の創造者。この私をもお造りくださった」という信仰は、他のどこにも見出せない素晴らしい信仰なのだと、改めて知ることができたのだそうです。

[2] 私は誰のものか

「主はわたしたちを造られた」という言葉に続いて「わたしたちは主のもの、その民」と歌われています。これもまた素晴らしい言葉です。私は誰のものか？ 私が私のものであれば、自分の思いのままに生きて良いわけです。私は医者警告を無視して自分の思いのままに自分の体を使い、野球の選手を続けて咯血し、永い療養生活を余儀なくされました。子が親のものなら、親の思い通りに扱って何が悪いかと言うことになります。国民は国家のものだということで、戦争に行き死んで来いと命令されます。

私の母は晩年、パーキンソン病になり、よろけてすぐ倒れたり、倒れるとなかなか起き上がれない体になりました。よく動いてテキパキと沢山の仕事をこなした手足は、昔日の面影を全く失いました。しかし「早く死にたい」という老いの愚痴は一言も申しませんでした。83 才の 12 月 15 日に脳内出血に襲われました。いよいよ葬式かと覚悟を決め、母の部屋のたんすを開けますと、不似合いな風呂

敷包みがありました。自分の葬式のために必要なメモ・写真・連絡先、折にふれて寄稿した文章、記録等がきちんとまとめられていました。「神さま、もう十分に生きました。御許にお召し下さい」と朝に夜に捧げて生きてきた母の祈りを見る思いがしました。

ところが年を越すのは無理だろうといわれたのに、一進一退が6ヶ月間続いたのです。神さまは母の祈りをおいそれとは聞いて下さいません。この先をどうなさるのか見当がつかなくなりました。もし母の体が母自身のものなら、母は自分の思い通りに始末していたことでしょう。これが私たち子供のものなら、私たちの都合によって母の生死が左右されかねなかったでしょう。

そのような時に私は、詩編 100 編を読みました。「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ」。このお言葉から、「加藤ハツコは私のもの、私の手の中にあるのだ」という御声を聞き取り、厳粛な思いと同時に、言い知れぬ喜びを与えられたのでした。

母や私たちの思いを超えて過した6ヶ月間、多くの方々から温かいお祈りやお見舞いを沢山頂戴しました。母のたんすには、何かを頂くとさっとお返しするために、きれいなナフキンやハンカチ等が用意されていました。ところが神さまは、母の最後を、ただただご好意を有難く頂戴するだけにして過させました。そして豊かな愛に包まれて御許にお召しになり、母の生涯を完結させて下さったのでした。私は「神さまのもの」ということが何と有難いことか、よくよく分らせていただいたのでした。

このように考えてきますと、「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた」というみ言葉は、本当に私たちの喜びの源です。そして私たちが本当に喜ぶ時に、心から感謝が込み上げて、体一杯に満ちあふれます。そしてその感謝が讃美の歌となって、神さまに捧げられるのです。

【結】

この詩編 100 は「全地よ」という呼びかけで始まっています。招きの聖句で読んでいただきましたように、詩編 96 には「天よ、喜び祝え、地よ、喜び躍れ、海とそこに満ちるものよ、とどろけ、野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め、森の木々よ、共に喜び歌え」と歌われています。これで分かるように、全地とは、神さまによって創造された海・空・野・山の全ての生きとし生けるものを指す言葉です。

私たちは一ヶ月前に詩編 23 編を読みました。荒れ野のような人生を歩むとしても、良い羊飼いである神さまは、その時その時に羊にとって必要なものを適切に与えて、養ってくださるのです。たとえ死の陰の谷を進もうとも、災いを恐れることはないのです。命のある限り、恵みと慈しみの方が、私を追かけて来てくれるのです。何と感謝すべきことでしょうか。